

## 「わけだ」に関する一考察

－「わけ」の相対性に着目して－

永 谷 直 子

【キーワード】 当然性 相対性 連体修飾構造 必然的關係 共有度

### 1 はじめに

「わけだ」という形式は、それを伴うことで「ある既定の事実からの当然の帰結であるとする」話し手の態度を表す「説明のムード」(寺村 1984) とするのが一般的な見方である。寺村 (1984) は、「わけだ」の基本的な用法を「当然の帰結」(1) とし、そこから派生した用法として「言い換え」(2)、「論理的帰結の強調」(3)を挙げる。

(1) (時計が午後 3 時を指している)

新幹線で名古屋までは 2 時間だから、向こうには 5 時ごろ着くわけだ。

(2) ピアノは全身で弾くものだ。つまり動物的な動きをするわけだ。(ク)

(3) 17 世紀っていうのは、まあ近代の始まりですからね、それはまあガリレオの望遠鏡だとかね、そうやってレンズを使って、とにかく見えないものまで全部見れるようになったわけですよ。小さいものも、宇宙のことも。まあ近代っていうのは、そこから始まったわけですよ…。こうやって、レンズを磨いて、レンズをのぞくと世界が全部見えるような、そんな気になれた、まあいい時代だったわけですね。(東)

また、同じく「説明のムード」とされる「のだ」との比較においては、松岡 (1987) では「のだ」の文と「わけだ」の文は共に「ある事柄 (P とする) と別の事柄 (Q とする) との関係を認定する」<sup>\*1</sup> 点で同一の構造を持つとした上で、「のだ」を「一方的な断定の感じが強い」のに対して「わけだ」は「相互了解的な断定」とする。そして、「のだ」は P と Q の関係を「話し手が確認・主張する」形式、「わけだ」を「話し手が納得する」形式としている。これは、前文と「のだ／わけだを伴う文」との関係が「のだ」を「主観的」、「わけだ」を「客観的」とする益岡 (1991) の指摘と同じく、われわれの直観にかなうものであろう。しかし、「のだ」と「わけだ」の違いを論じるにあたって、その主観・客観の対立を生み出す要因については深く触れられていないようである。「のだ」との比較の問題として、(1)～(3) でみた「わけだ」の表現機能をより明確にしようと考えた時、「わけだ」の意味・用法には「道理、理由、意味、事情…」等の意味を持つ実質名詞「わ

け」の性質が反映すると考える必要がある。「のだ」は「形式名詞+だ」という構造は同じくしながら、「の」が実質的意味を完全に失っているという点で「わけだ」と区別されると考えられるからである。本稿では、実質名詞の性質がいかに関わっているかを考えることで、「わけだ」の意味・用法をより明らかにしたいと考える。そして、寺村の指摘する、「わけだ」によって示される「当然性」と実質名詞「わけ」との関わりを考察することが本稿の目的である。そして、その考察を経た上で、上で見た寺村の分類する(1)～(3)の用法を区分する要素について考察する。

## 2 先行研究の検討

「わけだ」の意味用法と実質名詞「わけ」との関わりについて述べたものとして松岡（1993）を挙げておく。ただし、松岡の指摘するのは、本稿の目的である、「わけだ」の示す「当然性」と実質名詞「わけ」との関わりではない。松岡は日本語教育の現場において、学習者の混乱を引き起こすのは「わけだ」に前接する部分が(4)(5)のように「理由」「結果」の両方を表しうる点であることを指摘する。

(4)「大学の中が静かですね」

「冬休みに入ったのです」

「ああ、それで静かなわけですね」

「冬休みに入ったから、静かな」わけだ。(P, QのうちPを欠く)

(5)「大学の中が静かでしょう。どうしてかわかりますか」

「さて。あ、わかりました。つまり、冬休みに入ったわけですね」

「冬休みに入ったから、静かな」わけだ。(P, QのうちQを欠く)

(例文、( )〔 〕内の注ともに松岡（1987）より引用。傍線は筆者による。)

そして、このような例文の理解を学習者に促すにあたって、「文脈によって理由を表す場合と結果を表す場合がある」というような表面的な説明にとどまらず、「PとQの関係をあらためて理解し納得する」という態度が「わけだ」によって示されることを説明する必要があると述べた上で、「わけだ」に前接する部分が「理由」「結果」の両方がありうるのは実質名詞「わけ」の性質によることを指摘する。ここで松岡が指摘する実質名詞「わけ」の性質とは「わけ」が連体修飾節との関係において、寺村（1981）が指摘する「同格関係」に立つ場合と「相対補充関係」に立つ場合の両方に用いられる名詞であるということである。

<「相対補充関係」の例>

(6) モーラ神父が自分を呼び寄せたわけがわかった。

<「同格関係」の例>

(7) (十八世紀の後半ともなると) 人々はスペキュレーションにふけるよりは、ひとつでも新しい事実を発見するほうを導ぶようになった。実証できないようなことは論じてもしようがないというわけである。

(例文、( )〔 〕内の注ともに松岡(1993)より引用。傍線は筆者による。)

「わけだ」によって示される命題の捉え方と実質名詞「わけ」の連体修飾構造とを関連付けるこの指摘は重要である。「わけだ」の「形式名詞+だ」という構造を考えた時、「前接する部分を既定化する」という名詞としての機能に連体修飾構造のあり方は大きく関わっているだろう。本稿ではこの松岡の指摘を考察の指針とした上で、以下の2点に疑問を呈しさらに考察を深めたいと考える。

第1点として、「わけだ」における実質名詞「わけ」の性質の反映は、「わけだ」が前接する部分に「理由/結果」の両方を取りうるという機能のみに留まるか、という疑問である。1章で「のだ」との違いを指摘したように、「わけだ」においては「わけ」が実質の意味を持っているのに対し、「の」は完全に実質の意味を失っている点が、両者の異なりを生む大きな要因であると考えられる。しかしながら、松岡が実質名詞「わけ」の性質が反映していると挙げる例においては、「のだ」も同様の機能を持ち、「わけだ」特有の機能であるとはいえない。

(4)′「大学の中が静かですね」「冬休みに入ったのです」

「あ、それで静かなのですね」

(5)′「大学の中が静かでしょう。どうしてかわかりますか」

「さて。あ、わかりました。つまり、冬休みに入ったのですね」

よって、「のだ」との異なりをうむと考える、実質名詞「わけ」の性質の反映のありかにはさらなる考察が必要だと思われる。

第2点として挙げたいのは、松岡が「わけ」の連体修飾構造を述べる際に、相対補充関係において実質名詞「わけ」を、同格関係においては実質の意味が薄らいだ「わけだ」の例を挙げ、連体修飾構造の違いと実質の意味の有無とをパラレルな関係としている点である。また、同格関係においては「わけ」が「理由」の意味はなく逆に「結果」を表すと述べているが、実質名詞において「道理、理由、意味、事情」等の意味を持つ「わけ」が形式化すると「結果」の意味を持つという説明が、「わけ」の形式化の道筋を果たして明らかにしているのかという疑問が残る。

以上の2点を明らかにするために、3章では実質名詞「わけ」の性質を再度確認し、4章において「わけだ」の表現機能との関わりを考えることとする。

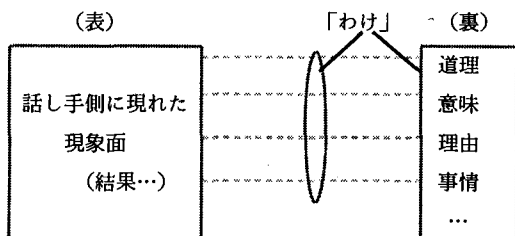
### 3 実質名詞「わけ」の意味・性格

#### 3.1 「わけ」の中心的意味

「わけ」に関する辞書の記述としては「①道理「わけのわかった人」②そのことばのあらわす、なかみ。意味。③理由。〔特別の〕事情。「どういいうわけで休んだのだ」『三省堂国語辞典第5版』<sup>\*2</sup>」等が挙げられる。森田(1980)はこれら個別の意味に通底する意味として、「わけ」が指し示すのは「話し手側に現れた現象面」の「奥(裏側)にひそむ事柄」とし、「現象の奥にある「原因、事情、意味」を「わ

け」と考えるか、「因果の筋道」を「わけ」と考えるかで、意味が分化する」とする。逆にいえば、ある事柄を「わけ」と捉えた場合、そこには「わけ」に対する「話し手側に現れた現象面」が意識されているといえよう。ある事柄を「わけ」と捉えることで、「話し手側に現れた現象」は「結果、結論…」等として意識されるのである。

#### 《「わけ」の捉え方》



本稿では「わけ」の中心的意味としてこの森田（1980）の規定に従ったうえで、「話し手側に現れた現象」と「奥にひそむ事柄」の関係に着目し、実質名詞「わけ」の意味・性格を探ることとする。

### 3. 2 「わけ」と連体修飾構造

「わけ」の連体修飾構造の分析に関しては、2章で松岡（1993）の考察を挙げた。しかし、既に述べたとおり、実質名詞「わけ」においては相対補充関係を、実質的意味が薄らいだ「わけだ」においては「わけ」が「結果」の意味を持つようになり、同格関係をとるという分析は、必ずしも当てはまらない例があるように思われる。

「話し手側に現れた現象」と「奥にひそむ事柄」（＝わけ）とは構文的にどのような関係にあるのかを考えた時、(8)に見られるように、「話し手側に現れた現象」は構文的には「わけ」の連体修飾節が指し示している。(8)において連体修飾節の事柄「加藤が、山のことを花子に積極的に話さない」は「わけ（理由）」に対して結果の内容を表している。連体修飾節の事柄は「わけ」の相対する概念を詳しく述べているということができ、確かに、松岡の指摘するように相対補充をとるうる、「相対性」をもった名詞であると考えられる。

(8) 加藤が、山のことを花子に積極的に話さないわけは、花子に余計なことを心配させまいという思いやりだけではなかった。(孤)

しかし、さらに実質名詞「わけ」と連体修飾節との関係について見ると、連体修飾節が「わけ」の相対概念を補充しているとはいえない例が見られる。<sup>\*3</sup>

(9) 「北岡さんの近くに現れるかもしれないわけで、尾行していたのですよ」(女)

(10) だが、「テロ事件を連想させる」というわけで、生身の演技を強調した宣伝ができないようだ。(朝 011130)

(11) 「それじゃ、関の親類の別荘があると云ったのはどう云う訳だい?…」(痴)  
(9)の連体修飾節「北岡さんの近くに現れるかもしれん」は「わけ(理由)」の内容を補充している関係にある。既に認識している「尾行していた」という事態の裏にひそむ「わけ」の内容が連体修飾節に示されているのである。このように、実質名詞「わけ」においても連体修飾節と「わけ」とは「同格関係」にある場合がある。よって、実質名詞「わけ」はその連体修飾節との関係においては「外の関係」における「相対補充」「内容補充」の両方を取りうる名詞といえる。

<相対補充関係> →「加藤が、山のことを花子に積極的に話さない」＝結果

(8) 加藤が、山のことを花子に積極的に話さないわけは、花子に余計なことを心配させまいという思いやりではなかった。(孤)

<内容補充関係> →「北岡さんの近くに現れるかもしれん」＝理由

(9) 「北岡さんの近くに現れるかもしれんというわけで、尾行していたのですよ」(女)

(8)の相対補充関係においては、話し手が既に認識している事態(Q)「加藤が、山のことを花子に積極的に話さない」は連体修飾節に示され、その「奥にひそむ事柄」(P)を「わけ」が指し示す。それに対し、(9)の内容補充関係においては、事態Q「尾行していた」の「奥にひそむ事柄」(P)の内容を連体修飾節が明らかにしているのである。よって「わけ」は形式化することによって「同格関係」をとるようになるとするのは正確な定義とは言い難い。むしろ、実質名詞において「内容補充」「相対補充」をとりうる「わけ」が形式化することによってどのような機能を帯びるかを考察するべきであろう。次章ではこのような「わけ」の性質と「わけだ」の表現機能との関わりについて考えたい。

#### 4 「わけだ」の表現機能

##### 4. 1 「形式名詞+だ」という構造

「わけだ」を助動詞(形式名詞と「だ」が結びついて助動詞化したもの)とし、実質名詞「わけ」と区別する境界の定義を見出すことは困難だが、ここでは、「わけ」に対応する主語が同一文中になく、前接する用言の一部になったものと考えておく。そして、「わけだ」が2文以上の文の関係付けを果たすのは、この「形式名詞+だ」という構造にあると考える。長田(1984)は「素材表示部+判定詞」の連文的職能について項を設け、「AはBだ」という表現においては「Bだ」は「Aは」という「問いの部分」に対する「答えの部分」を形成すると述べる。「素材表示部+判定詞」は「答えの部分」を構成しているために、その前提となる「問い

の部分」を必要とするのである。そして、同一文中に「問いの部分」がない場合、先行文（または後続文）中にその前提を求め、「連文的職能を発動する」とし、前文との関係付けがなされるとする。

(12) 先日のケガが今日彼が欠場したわけです。(わけ=実質名詞)

(13) 彼は先日の練習でケガをしたらしい。

だから、今日の試合には出場できないわけだ。(わけだ=形式名詞+だ)

(12)は「答えの部分」を形成する「(連体修飾節+わけだ)」の「問いの部分」が同一文中に存在する例である。それに対し(13)では同一文中にないために先行文にその「問いの部分」を求める。その結果として「わけだ」を伴うことで、前件と後件との関係付けがなされるのである。(13)においては、「わけだ」を伴うことで、先行文から発生した「その結果どようになったのか」という「問い」に対する「答え」が提示されるのである。さらにいえば、話し手は前件の相対する内容（理由に対する結果、結果に対する理由等）に対する「問い」を聞き手の内に想定し、その「問い」に対して解説をなす態度が「わけだ」を伴うことで示される。なお、この聞き手のうちにある「問い」とは聞き手の実際の意識と一致するとは限らず、あくまでも話し手の想定にすぎない。このような、話し手の想定と聞き手の実際の意識との一致／不一致が「わけだ」の表現機能を支えていると考えられる。

#### 4. 2 「わけ」の性質と「わけだ」の表現機能

4. 1では「わけだ」の「形式名詞+だ」という構造が「先行文との関係付け」という機能に果たす役割を考察した。本節ではさらに3章で見た「わけ」の性質と先行文との関係について考えてみる。

(        は「奥にひそむ事柄」(P),         は「話し手が既に認識している事態」(Q)を表す)

(14) 彼は先日けがをした。だから明日の試合は出場できないわけだ。

(15) 彼は先日けがをした。試合前のトレーニングが不足していたというわけだ。

「わけだ」に前接する部分について考えた時、(14)(15)いずれの場合においても、3章で見た実質名詞「わけ」の連体修飾節との関係が反映している。「わけ」に前接する部分と「わけ」との関係を考えて時、(14)においては、相対補充関係、(15)においては内容補充関係をとっている。(14)と(15)とは先行文の内容は同じでありながら、このような連体修飾構造の違いによって、(14)において先行文の「これからの展開」に対する「答え」を形成し、また(15)においては「これまでの経緯」に対する「答え」を形成する。このように「わけだ」を伴う文が示す「答え」は(14)においては先行する文の「結果」、(15)においては先行する文の「理

由」というように異なる。

しかし、いずれにおいても、実質名詞「わけ」の連体修飾構造における性質から、「わけ」に前接する部分は、既に認識している事態の「裏にひそむ事柄」(P)か、すでに「話し手側に現れた現象」(Q)のどちらかとして捉えられる。そして、「形式名詞+だ」という構造によって先行文との「関係付け」がなされた時に、その先行文は「わけ」に前接する部分が「裏にひそむ事柄」(P)と捉えられていた場合は、先行文は「話し手側に現れた現象」(Q)として、反対に「わけ」に前接する部分が「話し手側に現れた現象」(Q)として捉えられた場合は、先行文は「裏にひそむ事柄」(P)として関係付けられる。つまり、「わけ」に前接する部分の捉え方が、必然的に先行文の捉え方を決定するのである。

実質名詞「わけ」は、既に述べたように、前接する事態を「話し手側に現れた現象」(相対補充関係)もしくは「裏にひそむ事柄」(内容補充関係)として捉えるという性質を持つ。そのどちらにせよ、それに相対する事態が念頭に置かれている。

#### <相対補充関係>

- (16) 子供の担任が代わるたびに「お宅のお子さんはマイペースですね」と言われたわけは、親がマイペースだからだと気付いた。(毎95)

#### <内容補充関係>

- (17) 「北岡さんの近くに現れるかもしれんというわけで、尾行していたのですよ」(女)
- (16)' [親のマイペースな態度] (P) が [子供の担任が代わるたびに「お宅のお子さんはマイペースですね」と言われた] (Q) わけだ。
- (17)' [～現れるかもしれん] (P) というわけで [尾行していた] (Q)

ある一つの事態を捉えたとき、同時にその相対する事態の内容を意識するという、一連の意識が、実質名詞「わけ」の性質から生み出されるといえる。よって、「わけ」が形式化し、先行文との関係付けの機能を担った「わけだ」によって示されるのは、ある事態を P (/Q) と捉えたときに必然的に相対関係にある Q (/P) が意識されるといった、先行文と「わけだ」を伴う文との間の必然的關係である。

以上で述べた見解を同じく「説明のムード」とされる「のだ」との比較を通して簡単に確認しておく。

- (18) (音がするのが気になってドアを開けると雨が降っている。)

A: どおりで音がしていた {わけだ / \*んだ}。

B: 雨が降っていた {わけだ / んだ}。

- (18)において「わけだ」に前接する事態「音がしていた」は話し手が発話時以

前に既に認識していた事態である。この発話において示されるのは、話し手の関心の対象である事態Q「音がしていた」の相対する事態P「雨が降っている」の内容を明らかにしたという思考過程である。QとPの間の必然的関係を認識したことが「わけだ」を伴うことで示される。しかし、野田（1997）によれば、「のだ」は「認識していなかった事態を把握／提示する」という機能を持ち、(18) Aのように、既に認識している事態に後接することはできない。「のだ」が可能であるのは(18) Bのように、既に認識している事態Qと認識していない事態Pとを関係付ける場合である。「のだ」の主眼は先行する文と「のだ」を伴う文との関係を築くことにあるといえよう。一方、「わけだ」においては、既に繰り返し述べてきたように、PとQとの必然的関係を捉えることに主眼があり、(18) A、Bともに可能となる。「わけだ」を伴って、前件と後件を「PといえばQ/QといえばP」といった我々の意識の中で表裏として捉えられた必然的関係として提示（あるいは把握）する。ここでは話し手は「関係の築き手」ではなく「（一般的知識の中に既に）関係の示し手」としての役割を果たすと考えられる。

以上、実質名詞「わけ」の特性と「わけだ」の表現機能との関わりについて述べた。次章では、このような関係提示のあり方が1章で見た(1)「当然の帰結」から(2)「言い換え」、(3)「論理的帰結の強調」への広がりとともにどのように関わっているのか、簡単に述べる。

## 5 「当然の帰結」から「話し手の見方」へ

本章では寺村（1984）における分類(1)～(3)の用法を分ける要素を考察することで、4章における考察を確認することとする。

4章では「わけだ」の表現機能としてP・Qを必然的関係にある事態として提示／把握することを挙げた。「わけだ」を伴う文を先行文の必然的関係にある事態として提示／把握するということは、「話し手の捉えるPとQの関係性」と「聞き手の捉えるPとQの関係性」が一致しているという想定が話し手の内にあることを意味する。よって「わけだ」を伴う文は、話し手と聞き手が共有する（PとQの関係に対する）認識（ここでは暫定的に「前提」と呼ぶ）の存在を念頭に置いた上での発話となる。「わけだ」の用法において一貫して示されるのは「PとQの必然的関係を示す」態度であると考えた時、「当然の帰結」と「言い換え」の用法を区別するものをどのように考えたらよいのだろうか。

(19) (さいころを前にし①表（聞き手に見えている面）が6であることを示した上で) ②裏は1です。③だから、表は6であるわけです。

(19)のように「当然の帰結」として示す場合、話し手と聞き手が共有する前提としては一般的知識がまず挙げられる。「裏が1である」(P)と「表は6である」(Q)との因果関係に対して、聞き手が納得できるのは、「さいころは表と裏の合計が7である」という知識があるからであろう。話し手はそのような知識を聞き手

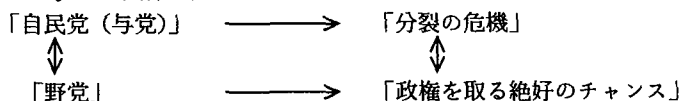


と共有しているという想定の上に、③を提出する。さいころの目に関する一般的知識が聞き手にあることが想定しにくい場合(子供など)、(19)のような発話はやや不自然であろう。このように、「Qわけだ」の当然性には話し手・聞き手による「思考過程における前提の共有意識」が働いているといえる。

このような「話し手・聞き手が共有している知識」は一般的知識だけとは限らず、話し手がなんらかの関係性を提示する場合もある。

(20) ～、不信任案が可決されてもされなくても、加藤氏らはほぼ党から除名処分を免れず、自民党は1993年以来二度目の分裂を迎えることがほぼ確定した。まさに野党にとって政権を取る絶好のチャンスが巡ってきたわけだ。(ス＝001118)

ここでは「自民党(与党)が分裂の危機にある」という関係性を提示した上で、「野党」は「政権をとるチャンスをもつ」という関係が必然的に成立することを示している。この関係を図示すると以下ようになる。



「A(与党)→B(分裂の危機)」の関係が成立するなら、「Aの反対(野党)はどうか」という視点を与えた場合、「Aの反対(野党)→Bの反対(政権を取るチャンスをもつ)」という関係は、当然性を持って受け入れられる。ここでは、「A→B」の関係をまず聞き手に提示することで、話し手と聞き手の共通の認識を設定し、「Aの反対→Bの反対」という関係が聞き手の予測にかなう当然のものとして提示しているのである。ここでは、「反対の立場から見るとどのようなことが言えるのか」という「反対の視点からの結論」を述べている。このように、「反対に」「別の観点から言えば」といった表現を伴って、聞き手に示された事柄の裏の面を当然性をもって表示する場合もある。

(21) 「(略)ほんとに惜しい証人を死なせてしまいました。悔んでも追っかないくらい残念です。佐山の死は大打撃です。だが、われわれがくやし  
がっている反面、こおどろしている者があるわけです。」(点)

(19)で見たように、前件と後件の関係を支える状況が共有されている場合には、「わけだ」を伴う文は「聞き手の予測しうる、もしくは既に認識している事柄」として提示される。しかし、その関係性を支える状況が、話し手から差し出され、恒常性を欠くにつれて「ある状況における前件と後件の関係性」を提示する用法へと移行する。寺村の指摘する(2)「言い換え」の用法である。この場合、PとQを関係付ける前提に対する認識の差(話し手>聞き手)が、結論に対する認識の差(話し手>聞き手)として把握され、「わけだ」を伴う文を前件の新たな捉え方として示すことになる。「わけだ」を伴う文は「ある状況における必然的な結論」として提示される。必然的な関係を捉える視点のありかに主眼が置かれるのである。

- (25) 誰にでもわかる言葉で文学語を書くこと、それが誰にでも読める媒体に載ること。商業資本と俗語革命というものが結びついた。B・アンダーソン流に言えば、その結びつきこそが「国民意識」を作り出すわけです。(村)

このように、PとQの必然的關係が成立する状況は段階性がある。PとQの關係を表裏關係にあるとする前提を話し手・聞き手が共有している場合は、「わけだ」をともなって「当然の結論」を提示することになる。またPとQの關係性が成立する状況が一般性を欠き、話し手・聞き手の間の共有度が低い場合には、PとQを必然的關係と捉える一つの見方を提示することになる。<sup>\*4</sup>

(下に近づくにつれてP・Qの關係の必然的状況の共有度は低くなる)

- 1) 話し手・聞き手が発話時に前に認識している前提（一般的知識など）
- 2) 話し手によって発話時に提示された状況



話し手の意識のうちに近い（非明示的な）状況＝話し手の視点

この段階ははっきりと区分できるものではないが、前提の意味合いが下に近づくにつれて、つまり話し手と聞き手の共有度が低くなるにつれて、PとQの關係性は一般性を失い、「ある前提に基づいた話し手の結論を述べる」という意味合いが濃くなる。「わけだ」を伴う文が「結果／理由」から「意味内容」に近づくにつれて両者の關係は一般性を失い、解釈として提示される。

<法則の性質>

<「わけだ」を伴う文の提出のあり方>

話し手・聞き手の内に既存（客観的）……………「結果／理由」として提出

- 1)
- 2)



話し手の内に既存（主観的）……………「意味内容」として提出

「わけだ」を伴う文の性質は、1)では聞き手の予測にかなう必然性を伴った結論、話し手・聞き手共に到達しう結論であったのに対し、下に近づくにつれ、「ある状況における話し手の結論の提示となる。いずれにせよ、話し手は「わけだ」を伴って「PとQの必然的關係が（話し手が恣意的に結びつけたものではなく）前提のもとに成立していること」という意識をもって提示する。その時点で話し手の発話の態度が決定する。そして、その前提の一般性もしくは話し手・聞き手間の共有度が「わけだ」を伴う文の発話の場における意味を決定するのである。

## 6 おわりに

本稿では「わけ」の特性と「わけだ」の意味用法との関わりに着目し、実質名詞「わけ」の連体修飾構造から見出される性質が「わけだ」の「P・Qを必然的關係にある事態として提示／把握する」という表現機能に関わっていることを考察した。その上で、その必然的關係を構成する前提の話し手・聞き手間の共有度が「わけだ」の用法を分ける要素となるという結論を得た。

ここでは、「わけだ」の示す態度と「わけ」の特性との関わりをより明らかにするために、先行文と後続文という2文の単位に限った分析に留めた。しかし、実際の「わけだ」の使用にあつては、2文単位では分析しえない、文の境界を越えたまとまりを形成することがあり、今後はより考察の範囲を広げ分析を進めていく必要がある。また、「わけに(は)いかない」「わけがない」「わけじゃない」等の複合的な表現と「わけ」の特性との関係を探ることで、今回試みた個々の要素の意味特性と複合の意味との関わりを考察をさらにすすめていきたい。

- ※1 松岡(1993)に、松岡(1987)での要点を記したものととしてこのような記述がある。
- ※2 辞書の記述のうち、本稿で「説明のムード」(形式名詞+だ)と判断するものの記述については、「④事情を説明するときの言い方「彼は知らなかったわけです」⑤結果としてそれが当然であること「それなら泣くわけだ」」があり、「わけにはいかない」「わけではない」「わけがない」の否定表現との複合形についても触れられている。
- ※3 もっとも、実質名詞「わけ」において相対補充と内容補充とが全く同じレベルで存在するとは考えにくい。内容補充においては用例のように「～わけだ」の形で従属節に現れる場合があるものの、名詞述語文の述語部に表れる場合は、(手元の用例(小説67冊、新聞の社説・投書・対談・文化欄4年分)による不十分な判断であるが)見られなかった。それは内容補充の連体修飾節部が、「理由-結果」という時系列に沿った意識の流れに逆行して「結果-理由」という順を提示するために、聞き手の意識を目当てにする意識が強いものであるからだろう。よって、内容補充の場合は例①のような名詞述語文ではなく、例②のように二文に分かたれることが多く、松岡の指摘のとおり、実質名詞「わけ」のより形式化された「わけだ」の形となる傾向があるといえる。
- 例(相対補充) 先日のケガが彼が今日試合を休んだわけです。

(内容補充)

①?先日のケガは試合前のトレーニングが不足していたというわけです。

②彼が先日けがをした。試合前のトレーニングが不足していたというわけだ。

- ※4 このように、PとQの関係を支える法則に幅があるのは実質名詞「わけ」の抽象度の高さが起因しているように思う。3.1で確認したように「わけ」の中心的意味は「話し手が捉えた現象の奥にひそむ事柄」であり、その「奥の事柄」の捉え方によって「原因、事情、道理、意味」などへと意味が分化する。表裏関係を「因果関

係」と捉える場合の方が客観性は高く、「現象」とその「意味」と捉える場合より話し手の主観が左右する。

【用例出典】

(ク) 雑誌『クロワッサン』マガジンハウス / (東)『平田オリザ戯曲集①東京ノート / S 高原から』平田オリザ 晩声社 / (朝) 雑誌『週刊朝日』朝日新聞社 / (村)『村上龍対談集－存在の耐えられないサルサ』文芸春秋 / (スニ) 新聞『スポーツニッポン』 / (毎) 新聞『毎日新聞』

・CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』新潮社版 NEC ハイブリッド 1995 新潮社

(女)『女社長に乾杯』赤川次郎 / (孤)『孤高の人』新田次郎 / (点)『点と線』松本清張 / (痴)『痴人の愛』谷崎潤一郎

【参考文献】(紙幅の関係上、直接引用したもののみ挙げる)

寺村秀夫 (1981)『日本語の文法 (下)』国立国語研究所

寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

長田久男 (1984)『国語連文論』和泉書院

野田春美 (1997)『の (だ) の機能』くろしお出版

益岡隆志 (1991)『モダリティーの文法』くろしお出版

松岡弘 (1987)「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』24

松岡弘 (1993)「再説－『のだ』の文、『わけだ』の文」『言語文化』30

森田良行 (1980)『基礎日本語 2』角川書店

【付記】拙稿は修士論文「『わけだ』に関する一考察－その実質的意味と心的態度との関わりについて」(早稲田大学大学院文学研究科 2001.3) をもとに、同年 5 月早稲田大学国語学会で発表した内容の一部に修正・加筆を施したものである。